

柴北川プロジェクト通信40号

～平成 27 年度収穫祭～

平成 27 年 10 月 25 日(日)

共助研の活動も今年ではや 7 年を迎えます。その一環の『収穫祭』が今年も盛大に開催されました。

今回参加したメンバーは 12 名。内訳は福岡から 11 名、大分県内 1 名（波多野さん）でした。その特徴として木寺さんと森脇さん両夫妻が参加され、少しアットファミリーな空気を感じられました。こうした活動が夫婦の絆づくりに役立っているのかも知れませんね（勝手な評価です）。

絆と言えば、小倉から参加の波木事務局長は先般繋がった“東九州道”効果（都市と農村が近くなる）を存分に受けて早々と到着し現地で交流中でした。

〈安藤さんが手ほどき〉



さて、現地は朝方の冷ややかさが残る中の好天気。いつもどおり午前 10 時に参加者全員が集合し、安藤さんから稲刈りの手ほどきです。「けがなく楽しみましょう」の号令のもと、稲刈りはスタートしました。作業中の会話を再現してみました。解読してみてください。



あんた、
そげなこ
つじゃあ
一指切
るでえ

そきあるワラち、くびっちから差し込ん
じ、立てちトントンそろえりゃいいんじゃ

共助研

こんな会話のもと、掛け干しが次々に立ち上がりました・・・しかし突然のハプニング！掛け組のひとつが倒れたのです。でもあわてる様子もなく、地元先輩たちは“しょわない（心配ない）”と淡々とサポートしていました。ハプニングと言え、今年はイノシシ被害の痕跡も。でも、出来栄はますますとのこと。そんな心配をよそに、今年も西の台の子供たちは稲刈りに加え、秋の虫達との触れ合いに楽しんでいる様子でした。



約2時間、心地よい汗をかいた後、愛する会の方々“にと”記念写真に収まりました。今年も参加の武市さんとお母さん、元気な笑顔です。愛する会の元会長の大塚さんも元気に御指南下さいました。けが無く無事に稲刈りを終えることができました。

〈稲刈り後、愛する会が「と」・・・1+1は？〉

そして、会場を体育館に移し「昼食会」と「神楽鑑賞会」です。何はさておき、会場の飾り付けや準備に敬服します。さらに、毎度、柴北レディースの皆様がもてなしてくれる“手づくりバイキング昼食”が、ほどよく動かしただけにエネルギーを充填してくれるのです。いかがですか、観てると・・・

食べてみたくなりませんか？ 私が、ダンゴ汁をおかわりした時の会話です。『今年もようきたなあー』『はい、ありがとうございます』・・・『また、き（来）よえ』と。何とまだこれから楽しむのに気の早い展開に苦笑しました。子供たちのみならず、親御さん達そして郷愁に誘われ、つつい大盛りの膳の中年以上グループ。誰しもがここの一番の幸せ笑顔を見せていました。



歓談するうちに♪トツトツク・・・ドブドソドソ♪という囃子が流れ、いよいよ黒松神楽が始まりました。囃手の大太鼓の方は何と御年83歳！演目は「柴引き」と「五穀舞」です。柴引きでは子供達が演舞者と「シャカキ（釈迦木）」を引き合う様に会場から声援が届けられていました。続いてお楽しみの五穀舞です。気のせいかなー毎年、お菓子が増えているような・・・

《柴引き》



《五穀舞》

共助研



会場のボルテージが少し治まった後は、全員で花にちなんだ歌にそって、今日の疲れを残さないクーリング体操をしました。いたせりつくせり・・・です。

さて、楽しい時間は短いものです。終始、会の進行世話役をなされた渡辺さんが今日の感想を子供達に慣れた口調でのインタビューです。子供達の反応は、五穀舞から始まり稲刈りそして昼食と話題豊富でした。

続いて結びに今回参加された団体それぞれから挨拶がありました。大分市の西の台小学校“ととろ倶楽部”部長、共助研の副会長（★）、柴北川を愛する会会長の各氏から本当に暖かみのある挨拶が届けられました。

皆さん、また会いましょうね！

そして、帰路でのエピソードです（了解とらずごめんなさい）。

- ・いつの間にか森脇さん（奥様）とメル友になった武市さん
- ・車窓から山並みや柿畑を眺め風景談義を続けていた木寺さん夫婦
- ・気持ちの若いハンドルさばきの山下さん
- ・カボスや柿で増えた車重に気遣いながら運転された森脇さん

一さて、以下は私の感想です。

今回も多く参加者が集まりました。田んぼでの歓声が耳に残っています。言うまでもなく昼食は百点満点（以上かな？）。神楽舞では、演目に応じて自然と体も心もシンクロし、会場にあふれる元気な声と最高の笑顔に包まれ、一体感を感じました。けが無く、事故無くそして盛会の内に祭りの幕が下りました。感謝しつくせない、そして来ないと心配をかけそうなレディースのご婦人達。また、愛する会の皆様はいつも元気いっぱい、さすがに故郷を愛しているなあとつくづく感じました。世の中、地域創生と騒いでいますが、長谷地区での交流は、そうしたことを意識することなく、地域の方々が主人公になって、持続している粋組みだと確信しています。会場には老若男女が見せる微笑みと思いやりが漂い、まさしく田の神さま、祭りの神様が見守っているかに感じたのは私だけでしょうか。皆様、お疲れ様でした。

（文責 ★）